
月と花

ガラクタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月と花

【Nコード】

N3797W

【作者名】

ガラクタ

【あらすじ】

ある2人のお話。

それは夜、秋の綺麗な月が出ている日のこと。

「皆、どこにあるの」

「え？」

僕は、どこにいるのっていう間違いかと思った。

「どこにいるのだから、」

そう言いたかったけど、真面目な彼の顔を見ると、間違えてるとは言えなかった。それよりか、それを技と言っている様な気がしたのだ。

「皆って？」

急に言った彼の言葉にとりあえず、疑問する。

「皆は皆だよ、ずっと前からここに居たんだ」

彼はたまに不思議なことをいう。

何か見えているような、そんな目つきでどこかを見ているけど、僕には到底そんなものは見えないし、見たくもない。

「そっか」

風が静かに拭き始めた、そんな夜だった。

しばらく彼と月を眺め立っていた。

「お酒、いる？」

「うっん、まだあるから」

彼は、ゆっくりと飲むのが好きだった。

「そう」

カランと氷の音が響いた。

「月が綺麗だ」

小さく呟く彼の声に僕は月をまた見た。

「あ・・・」

秋だというのに、綺麗な花びらが舞っていた。しばらく、それに見つめていた。

あまりにも綺麗で時間が経つのも忘れていた。きっと彼も忘れていたのかもしれない、手に持っていたお酒のカーンという氷の音に少しびっくりした様子だった。人肌には少し寒い風がなんだか心地よく感じられた。

「見えるっていうのも悪くないよね」

「え？」

「一体、どういうことだろうか。」

「君には見えているんでしょう、この花びらが」

「僕……？」

「そうだよ」

その言葉と彼の表情で言っていることが分かってしまった。結局、僕も見えるという存在なんだ。

「こんな綺麗だったら、見えてもいいよね」

もう一度というように、彼は言う。

「うん」

その花は一体どこから来ているだなんて、分かるはずもなかった。

「僕、お酒温めてくる」

「うん」

彼はよほどこの景色に見とれているのか、寒いことを忘れている。

僕は、2人分のお酒と毛布を持ってきた。

「はい、寒いだろ」

「……ありがとう」

暖かいお酒は、冷えた体を温めた。

しばらく黙って、月を見ていた。

時間が止まってしまえばいいのと思ってしまった。

(後書き)

急に思いついたので、投稿しました。
私もお酒飲みながら、月みたいw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3797w/>

月と花

2011年10月9日15時59分発行